WOMEN'S SPORTS FOUNDATION JAPAN

NEWS

2003 APRIL

VOL.42

第１回全日本女子アマチュアボクシング選手権
（フォート・キシモト）

Message　社会の理解をるために　三ッ谷洋子 ―― 2
インタビュー　精神面から選手を支えるメンタルスキル・コンサルタント　田中ウルヴェ京さん　3
Opinion　女性スポーツとマスコミ　畑 律江 ―― 6
Women's Sports　ＪＷＳ設立の目的と活動　小笠原悦子 ―― 8
ブライトン宣言とは ―― 9
Column　Ｌリーグを目指す「美人」サッカーチーム（中）　本田美登里 ―― 9
会員の広場　蓮見直子　金子和子　後藤忠弘 ―― １０
事務局便り ―― １１

WSF Japan

■ Message ■　　WSF ジャパン代表　三ッ谷洋子

社会の理解を得るために

1月末に出席した座談会で、とても興味深いお話を聞きました。これは「スポーツと文化」（発行：日本体育・学校健康センター、秩父宮記念スポーツ博物館）という冊子の創刊号用に企画されたもので、「オリンピックに未来はあるか」がテーマでした。

「女性の時代は終わった」

近年のオリンピックでは日本の場合、男性より女性の活躍が大きく取り上げられるようになっています。この席上で、オリンピックに長年スポンサーとしてかかわっている松下電器の担当者、井谷直樹さんに、スポンサーの姿勢としての対応について質問してみました。

これに対して、井谷さんは「スポンサーの世界では、女性、女性といっても、今ごろ何をいってるのか、と思われるのが関の山だ」と答えられました。広告の世界では「女性」という切り口はとっくに終わっているということでした。

さらにびっくりしたのは、選手をサポートする場合、「男性と女性では違いがある」ということです。「男性より女性のほうが、気持ちよくサポートできる」のだそうです。

「アトランタオリンピックで敗退したヤワラちゃん（田村亮子選手）は、負けてから一層、人気が出てきましたよね。女性選手は負けても『よく頑張ったね』となるけれど、男性だと『何だ、この野郎』となるんです」

つまり、同じように試合に負けても、消費者は女性選手には励ましの拍手を送り、男性選手には罵声を浴びせる―という正反対の反応が見られるというのです。なぜ、違いが出るのか。こんな大衆心理が生まれる原因を、ぜひ知りたいものです。

一方、私の仕事の分野であるスポーツ業界や、理事や委員等としてかかわっているスポーツ界は、一般の社会に比べ女性の進出が非常に遅れています。

その構造が旧態依然としており、組織の中核にいる人々が、女性の意見を反映させることで、一層の発展が可能であることに、思い至らないからだと、私は思っています。

急激に変化している今日の社会において、スポーツの世界もそれに対応し、変化しなければなりません。そのときに必要なのは、社会で半数を占めている女性や、未来を託す次の世代の意見に、耳を傾けることです。

田嶋陽子は勘弁して

私自身は女性として、折に触れて「女性が意見を言える機会を増やしてください」と、発言するようにしています。

スポーツ界の重鎮が集まったパーティーでこう言うと、ある男性から「でも田嶋陽子みたいなのが出てきたら大変だよ」と反論されました。それからしばらくして、今度はスポーツ団体の会議で隣席の男性が、「女の権利とかいって、田嶋陽子みたいなのは、ごめんだ」と、同様のことを口にしました。

男性主導の日本の社会において、女性がその能力を正当に評価されるのは、並大抵のことではありません。

欧米社会にくらべ、その大変さは男性の「3倍」、場合によっては「10倍」ともいわれます。能力のある多くの女性が、日々の生活の中で頑張っています。そんな女性の鬱憤を、威勢のよい物言いで晴らしてくれたのが、テレビの中の「田嶋陽子」だったようです。

それにしても、短期間に2度も彼女の名前が語られたことを不思議に思いましたが、それほど一般の男性に対して、大きなインパクトを与えているということなのでしょう。

私は、一方的に持論をまくし立てる彼女の姿が好きになれず、また政治家としての姿勢にも疑問を持っています。

しかし、「女性として」などと意見をいうと、このように短絡的に捉えられる一面があることも、また事実です。女性の行動や実績が、これからも厳しく問われ続けることを、覚悟しなければならないようです。

精神面から選手を支える
メンタルスキル・コンサルタント　田中ウルヴェ京さん

東京・白金台にて

スポーツ選手にとって一線を退くとき、その後の進路決定が大きな問題となります。1988年のソウル五輪シンクロナイズド・スイミングで銅メダリストとなった田中京（たなか・みやこ）さんは、メンタルスキル・コンサルタントという道を選びました。結婚された現在、シンクロ界・スポーツ界だけでなく、様々な分野の人たちを対象に活躍している田中さんにお話を伺いました。

（4月11日＝聞き手：高橋昭子）

私を救ったメンタルスキル

―　現在、メンタルスキル・コンサルタントをしていらっしゃるとのことですが、カウンセラーとは違うのですか。

田中　カウンセラーや臨床心理士は、心理的にマイナスになっている状態からもとの状態に戻すのが仕事ですが、メンタルスキル・コンサルタントは、普通の状態の人をよりプラスの状態に変えていくために、コンサルティングをします。

スポーツ選手の場合は、試合に勝つため、実力を発揮するための、いわゆるメンタルトレーニングです。

―　実際には、どのようなカウンセリングをしていらっしゃるのですか。

田中　例えば、会社勤めの人ならプレゼンテーションをする時、ピアニストならリサイタルで実力を発揮できるように、トレーニングをします。

最近増えているのは、リストラされる人、された人のためのコンサルティングです。

スポーツの世界でいうと、相撲の力士や、Jリーガーの現役引退後のことを考えるためのコンサルティングをしています。

―　現役が対象なのですか。

田中　現役選手だから、そこまで考えなくてもよいと思われがちですが、あえて考えることで、今の選手生活に、より前向きに取り組める。目標がクリアになるので、現在すべきことがやりやすくなります。選手をやめた後も精神力を培えるという指導をしています。

―　ところでメンタルスキル・コンサルタントになろうと思われたきっかけは。

田中　ソウル五輪後に現役を引退してバーンアウト（燃え尽きて）してしまい、身も心もボロボロで、何をしようかあまり考えられませんでした。ただ流れでシンクロのコーチになりました。大好きなシンクロの指導ですから、とてもやりがいはありましたが、やっているうちにコーチとは単に技術的な指導だけでなく、心理面の指導がと

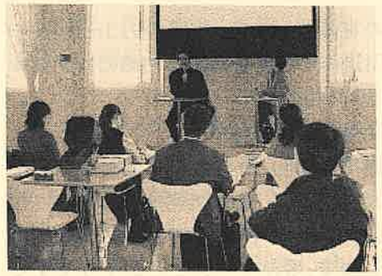
ても重要なことに気づきました。

コーチである自分自身が成熟していなければいけない。哲学を持ち、リーダーシップのスキルも必要。でも、自分にはそれらがないことをつくづく感じました。20代前半だったので無理もないことでしたが、心のことをもっと勉強しなければいけないと感じました。

そんな時、JOC（日本オリンピック委員会）の派遣でアメリカへコーチ留学をしました。ここではじめてスポーツ心理学があることを知りました。集中力や、やる気を出す方法など、自分が今までやってきたことそのものに理論がある事を知ったのです。これはシンクロだけでなく、ほかの競技にも伝えられるべきものじゃないか、そう思ったのがきっかけといえばきっかけです。

― コーチとしての勉強をしていくうちに、メンタルスキル・コンサルタントに興味を持たれるようになったのですね。

田中 何しろその勉強をすることで、自分が一番救われました。現役を引退して本当にボロボロになっていましたから。こんなに悲しいことは他の選手に経験してほしくない。勉強していることを活かして、後進の指導ができたらと思いました。



一般の人を対象にしたレクチャーも（奥の右側が田中さん）

時間は圧縮パックのようなもの

― 毎日、仕事でお忙しいようですが、ご家庭との両立はどのようにされているのでしょう。

田中 選手のときは24時間、全てが自分の時間でした。でも、結婚して24時間が自分のためだけの時間ではないことに気づきました。２児の母、妻、コンサルタント、シンクロの解説と様々なことをしています。本当に分刻みで動いています。

時間て圧縮パックのようなもので、つめればつめるだけ空く部分も出来るんです。忙しいというのは認知の仕方であって、そう思ったとたんにストレスになってしまいます。まだ食事をする時間がある、トイレに行く時間もある、と思えば楽に感じます。

「認知の中ではマイナス要素を入れない」。イライラする時間がもったいないですよ。自分にとって幸せだと思うチョイスをしたら、言い訳をしないことです。

― ご家族の協力はいかがですか。

田中 主人がとても助けてくれます。彼もとても忙しいんですが、それでも夜８時までに帰ってこようと努力してくれるし、子供と遊んでくれます。私が仕事をすることに対して、とても支援してくれます。

お互いに家族が第一という約束を大事にしています。仕事と家族・家庭にそれぞれどの程度比重をおくか、バランスのとり方についてよく話し合いをします。主人とは５分でも話そうと努力しています。

フェアの大切さを学んだ「女性スポーツ」

― アメリカと日本では、スポーツに対してここが違うと思うことはありますか。

田中 特に「スポーツと女性」について、アメリカではあんなに問題になっているとは思いませんでした。大学院に「女性とスポーツ」のテーマで１つの講座があることに驚きました。日本にいたときは、シンクロ競技ということもあり、特に差別を受けたことはないし、女性だからといってハードルがあるとは感じていませんでした。

アメリカでタイトルⅨ（教育修正案第9条＝教育における性的差別の禁止を規定）を知って平等の必要性がわかりました。もし、私がレスリングやラグビーをしたくなったら、当然、平等という話が関わってくるのだと思うと、すごく関心が出てきました。“女性に対する平等”という考え方を学びました。

本来、人間には男も女もないと思います。生物的なところが違うのですから男と全く同じ、イコールにはなれませんが、フェアでなければいけない。男だろうが女だろうが子供だろうが大人だろうが、フェアでなければいけないと思います。

見た目第一の報道に悩んだことも

オリンピック精神がそうであるようにスポーツにとっても、フェアであることがすごく大事です。スポーツからフェアプレーを学ぶことで社会、教育、全てにつながっていくことを学びました。私にとって、それは女性スポーツから始まっています。

― そのような意識を持って日本のスポーツ界を見たとき、何か感じたことはありますか。

田中 日本に戻ってすごく嫌だったのが、メディアが外見だけで女性選手を判断するということです。グラビアで可愛い選手がクローズアップされる。なぜ競技の上手な人ではないのか。

見た目が第一なんですね。これは日本社会の男女のシステムに問題があるのではないでしょうか。男の人の立場から見たメディアが多い。例えばスポーツ新聞は男性読者が対象です。

男性の好むタイトル、写真はお尻のクローズアップ。スポーツ選手はタレントではありません。タレントと一緒に扱われるのは嫌ですね。

― ご自身、女性として、女性選手として、そのような経験をされたことはありますか。

田中 私がソロで優勝し、（小谷）実可子ちゃんが３位になった年ですら、新聞には彼女のほうが大きく出て、私の顔は半分しか出ないことがありました。10代の女の子としてはすごく傷つきました。鏡を見て、私のどこが可愛くないのだろうかと真剣に悩みました。

私が勝手に比較していた面もあったかもしれませんが、メディアはもうちょっと競技重視にしてもよいのではないかと感じました。いま思えばこれって競技に対してフェアじゃないですよね。フェアに扱って欲しいですね。

現役時代、試合の記者会見でボーイフレンドはいますかといったプライベートなことを聞いたり、ケーキを我慢するのが大変ですね、などと的外れなことを言う記者がいました。

シンクロ選手は浮力をつけるため食べるのに必死なのに、何のリサーチもしていない。日本の場合は、スポーツをスポーツとしてみていないと思いました。

夢はナナハンに乗った７０歳

― ご自身の現役引退後の道を選択するとき、シンクロに直接、関わらない分野で不安はありませんでしたか。

田中 メンタルがとても面白かったし、もっと勉強をしたい。メンタルスキルの仕事をするのは、自分のためにもなっています。人間的な成長には哲学が必要です。日々、勉強です。

でも将来の大きな夢は、やっぱりシンクロに関わることなんです。本当のシンクロを、エンターテイメント化したい。いつかきっと実現させたいですね。70歳くらいにはやりたいですね。

― 70歳ですか。是非、実現してください。

田中 あとナナハンにも乗りたいんです。ナナハンが無理でもマニュアル車をガンガンとばして、筋肉がしっかりした、健康でいきいきした70歳。それが出来ていたらすばらしい。

― 楽しみにしています。

<田中ウルヴェ京さん略歴> ソウル五輪シンクロナイズドスイミングのデュエットで銅メダル獲得。1991年より渡米し、主にスポーツマネジメント、スポーツ心理学を学ぶ。現在、日本大学医学部講師、国際水泳連盟アスリート委員などを務める。著書、訳書多数。67年、東京生まれ。夫はフランス人。２児の母。

Opinion

女性スポーツとマスコミ

毎日新聞学芸部副部長　畑　律江

私は子供のころから体育が苦手だった。新聞社に入ってからも、スポーツとの接触といえば、支局時代に高校野球の予選をよちよちと取材して先輩記者を不安がらせただけで、あとはほとんど学芸部畑で仕事をしてきた。こんな私が女性スポーツを報じるマスコミのあり方について書くなんて、実に荷が重い。それでも、日本の新聞作りが男性側に強くシフトしていることに常々悩んできた者として、感じることはある。思いつくままに指摘してみたい。

女性とマスコミについて考える時には、常に２方向からのアプローチがあると思う。一つはマスコミで働く女性の状況。そしてもう一つは、紙面などでどのように女性が表現されているかという問題である。両方の問題は、互いに深く影響し合っている。

スポーツを報じた女性記者たち

新聞社でスポーツを主に取材するのは運動部である。生活面、家庭面は「女性向き」、運動面は「男性向き」と長く考えられてきたために、スポーツ報道に携わる女性は、かつては非常にまれだった。

そんな中、今でもその存在の大きさが語り伝えられている記者は、毎日新聞の前身、大阪毎日新聞社（大毎）で活躍した人見絹枝（1907～31年）である。優れた陸上選手だった彼女は、大毎の運動課長、木下東作の説得で入社した。人見は「自分で走って自分で書く」優秀な記者となり、当時の女性たちとスポーツとの距離を縮めた。

人見に限らず、どうやら初期の運動部の女性記者たちは、自身が優れた運動選手だったようだ。戦後間もない毎日新聞大阪本社の運動部にも２人の女性がいたが、いずれも運動選手で、中でも山内リエ（47～60年に在籍）は、戦前戦後を通じて走り高跳び、走り幅跳びなどで活躍した女子陸上界のトップジャンパーだったという。

私のような普通の女性記者がスポーツ取材をするようになったのは、60年代ごろからしい。64年の東京オリンピックも、女性の進出への追い風になった。だが当初は、女性記者の取材はアマチュア・スポーツや大相撲に限られた。深夜勤が制限されていたため、夜10時までには仕事を終えねばならなかったのだ。86年に男女雇用機会均等法が施行され、労働基準法の女子保護規定が大きく撤廃されてから、女性記者のプロ・スポーツ取材が本格的に始まる。毎日では87年に初の女性のプロ野球記者が誕生した。

紙面で強調される「女性」

私が入社した80年ごろは、新聞社の編集部門に占める女性の割合は0.8%程度だった。それが今では１割を超えるようになった。とはいえこの比率は、各国のマスコミと比較するとまだまだ低い。

新聞の送り手側への女性の進出の遅れは、当然、紙面上にも影響を与えてきた。普段、何気なく見過ごしている表現の中に、固定的な性別役割意識や、男女の不均衡な扱いが顔をのぞかせることがある。

まず気になるのは、特に必要がないのに職業名などの上に「女性冠詞」がつくことである。女子大生、女医、女流画家、女性市長、そして女子選手。男性が「標準」であり、女性が「特殊」だという意識は私たちの中に根強くあり、記者が何気なく使う女性冠詞にそれが表れてしまう。また女性のスポーツ選手の場合、「（伊藤）みどり」「（橋本）聖子」などと、名前がそのまま愛称になって見出しに踊るのも気になる。以前スポーツ紙などの見出しで、「小泉首相」に対し「真紀子外相」が盛んに使われた時期があったが、それと似た現象である。最近は「カズ」「イチロー」などと名前で呼ばれる男性も出てきたが、女性の場合はニックネームとして名前を意識的に流布させたわけではないだろう。

さらに、「（投手は）女房役の捕手とがっちり握手した」などといった定型的な表現の中に、女性役割への決めつけがのぞくこともある。

外国の女性選手の会話を訳す時に、必要以上に「女言葉」を使わせてしまうのも、考えものである。女性が「メダルが増えたわ」「注目されたの」などと話している一方で、男性は「僕の得意技さ」「訓練してきたんだぜ」などと話している。今の日本人の会話を筆記してみても、性別による差がこれほどあるとは思えないのだが。

また、スポーツ記事の魅力は迫力ある写真だが、女性の写真は、フィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングなどの採点競技で優遇して扱われる傾向にある。昔はよく、世界的なスポーツ大会の度に、読者の目をひくためか、美貌の女性選手の写真を集めた「大会の名花」特集が組まれたものだ。

最近では、シンクロに打ち込む男子生徒の映画が話題を呼んだり、女性が男性を膝の上にのせるアイスダンスの演技が拍手を浴びたりしたが、従来の「美」の基準をマスコミも一度、見直す必要があるだろう。こうした見直しの表れか、女性を集めた「大会の名花」特集は、2000年のシドニー五輪あたりから、かなり減ってきているようだ。

男女で異なる「二人三脚」物語

さて、次に気になるのは、事実をどのような流れで報じるかという「文脈」の問題である。

近ごろはやや少なくなったものの、女性のスポーツ選手が既婚の場合、「妻・母」役割を必要以上に強調する表現が目につく。「母は強し」「ママさん選手」「ミセス好調」などとして、家事や子育ての体験から得た余裕や広い視野、夫からの愛情が、いい成績につながった、という物語が展開するのだ。

確かにこうした報道は、既婚女性を励まし、後進を勇気づける役割を果たしている。だがその反面、妻・母役割への過剰な意味づけや女性役割の決めつけにも一役かってはいないか。男性の場合、夫・父経験が成績と結びつけられることはほとんどない。

また女性選手の場合、栄光への道のりが、厳しいトレーニングで彼女の能力を開花させた男性（多くは父親やコーチ）との「二人三脚」物語として語られることが多いように思える。

たとえば外国人男性コーチが、日本の女性選手に「お前の演技をすれば勝てる。それ以外は考えるな！」と指導したとし、「名選手の陰に名コーチの存在があった」と結ぶ記事があったりする。コーチの命令口調は、まるでひと昔前のスポーツ漫画のようで違和感がある。これが男性選手になると、彼を陰で支え続けた母や妻との「二人三脚」物語になるケースが多い。

小出義雄監督に金メダルを掛けるマラソンの高橋尚子選手　（シドニー五輪）

そもそも女性も男性も、ともに誰かに支えられ、引っ張られて、強くなったのである。その過程のどこに注目して書き込むかは記者の判断だが、そこに性別による思い込みが、紛れ込むのではないか。

女性に伝える新たなスポーツ観

私はスポーツが苦手だと書いた。スポーツは「男子のするもの」で、どんな運動をしても「強く、速く、高く」ない自分はダメなのだという苦手意識があった。だが、そうした意識を育ててしまった原因の一つは、ひょっとすると、女性があまり「登場しない」スポーツ報道だったのかも知れない。

今、報道に必要なのは、生涯のあらゆる時期を通して「体を動かす」ことの楽しみを享受し、健やかな暮らし作りにつなげていけるようなスポーツ観を、女性たちに伝えていくことではないだろうか。

過去の報道の定型的な「文脈」を読みかえ、女性とスポーツとの新たな良い関係をどう作るか。これからのマスコミの、大きなテーマになるだろう。

<はた・りつえ>　大阪市生まれ。1980年に毎日新聞社に入社。神戸支局を経て、82年から大阪本社学芸部。99年、夕刊編集次長。2000年から現職。

（この原稿は、2002年3月2日に開催したWSFジャパン創立20周年記念「女性スポーツセミナー　OSAKA」（クレオ大阪中央）において、畑さんが講演された内容を、改めてまとめていただいたものです。）

JWS(ジュース)設立の目的と活動

小笠原 悦子

世界会議を日本で

JWS(Japanese Association for Women in Sport =ジュース)は1999年2月、アジア開催が決定していた第4回世界女性スポーツ会議(2006年)を日本へ誘致し、「他の地域に比べて遅れを取っていた日本およびアジアの女性とスポーツに関わる環境整備に拍車をかけること」を目的の一つとして設立された、日本初のNPO法人である。

この年の10月に、JWSの長期展望をより多くの人に知っていただくため、第1回JWSシンポジウムを開催した。そして2001年6月には、第1回アジア女性スポーツ会議を大阪で開催し、アジアの女性スポーツネットワークを確立。

その秋に第4回世界女性スポーツ会議開催のために熊本市、JOCとともに共催するという立場で立候補した。

そして昨年5月、第3回世界女性スポーツ会議(カナダ・モントリオール)において次期開催組織メンバーとして正式に承認された。その後、JWSは世界的な女性スポーツネットワーク組織、IWG(国際女性スポーツワーキンググループ)の事務局を兼ね、4カ国語(日英仏西)でウェブサイト(www.iwg-gti.org)による世界中への情報発信を含むプロモーション活動を開始した。

IWG事務局の業務としては、IWG年次会議の準備のほか、国内外の女性とスポーツに関わる会議、大会、セミナー等へ出向き、第4回熊本世界女性スポーツ会議のPRを行うとともに、各国の女性スポーツに関わる問題を共有するためのディスカッションに参加している。

コーチセミナーや「白書」の作成

JWSはこれまでに数多くの"成果"を世に送り出している。その1つは、昨年で第5回を迎えた「JWSトップコーチセミナー」である。毎回、オリンピックで活躍する女性コーチを迎えてパネルディスカッションを行ってきた。

また、一般の女性指導者向けにも3回ほどセミナーを実施。それを発展させ、JWSが企画・監修となり「女性のためのスポーツ指導」(紀伊國屋書店刊)というビデオを発売した。

この他、これまで文部科学省の委嘱事業として女性とスポーツの実態を表わした「女性スポーツ白書」、子育て期の女性のスポーツ関与に注目した「女性のスポーツ参与支援システムに関する調査報告」を報告書として作成した。(詳細はwww.jws.or.jp参照)

JOCが女性スポーツ委員会設置

第4回世界女性スポーツ会議は熊本市で2006年5月11-14日の4日間開催される予定である。開催まであと3年。第1回はイギリス・ブライトン、第2回はナミビア・ウィンドホークが会場となり、前回の第3回はカナダ・モントリオールに97カ国から550名を超える参加者を得た。

熊本会議の規模は目下、国内を含む100カ国から700名を見込んでいる。この4月には熊本市に会議準備室、共催者であるJOCにも昨年の女性とスポーツプロジェクトが発展した「女性スポーツ委員会」(小野清子委員長)が設立されたことで、本格的な準備体勢が整いつつある。

第3回世界女性スポーツ会議(カナダ・モントリオール)

詳細な内容はIWGのメンバーとともに話し合いを繰り返しながら決定されるが、開催地である日本およびアジアが、この会議開催をバネにし、女性とスポーツに関わる環境整備が飛躍的に進むような企画をすることが重要だと、考えている。

(関連記事:9ページ「ブライトン宣言」とは)

<おがさわら・えつこ> WSFジャパン会員、NPO法人JWS(ジュース)理事長。IWG(国際女性スポーツワーキンググループ)共同議長、OCA(アジアオリンピック評議会)女性スポーツ委員会委員なども務める。

column

Lリーグを目指す「美人」サッカーチーム(中)

岡山湯郷Belle監督 本田美登里

平成15年1月10日(金)、突然、朗報が入りました。Lリーグへの参入が、日本サッカー協会評議員会において、正式に承認されたのです。参入を希望するチームが他にも数チームあり、実際に「直接対決」があると聞かされていたので、私たちにとっては本当に突然、舞い込んだビッグニュースでした。

ところで今回は、私がチームの監督をお引き受けすることになったきっかけについて、少しお話をします。現役引退後、Lリーグ事務局に勤務し、デスクワークをしながら女子サッカーへの普及活動として、全国各地へサッカー教室に出かけていました。その後、周囲の方の薦めもあり指導者ライセンスを取得し、U-18女子選抜チームのコーチを3年にわたり経験させていただきました。

現場への思いがつのりはじめた2000年、W杯キャンプ地に立候補した美作町の方が、日本協会に何かと相談に来られていました。キャンプ地に立候補したものの、サッカーブームを一過性のもので終わらせないようにと、女子サッカーチームの設立を検討されていました。あとは言うまでも無く(?!)、現在にいたります。

4月から新入部員7名が加わり、総勢29名。練習も賑やかです。ゼロからスタートしたチームが、着実に目標に向かって歩き始めています。監督業も3年目を迎えますが、新たなLリーグという舞台に選手とともに初心を忘れず、"全力蹴球"で挑みたいと思います。(つづく)

ブライトン宣言とは

「ブライトン宣言」は1994年、英国スポーツカウンシルが開催した第1回世界女性スポーツ会議(ブライトン)において採択された。「スポーツ文化を、女性があらゆる側面で、最大限に関わることを可能にし、それを尊重するようなものに発展させること」を究極の目的としている。

その内容は、次のような10の原則から成り立っている。

1.社会とスポーツにおける公正と平等 2.施設整備 3.学校とジュニアスポーツ 4.参加促進 5.スポーツの高度なパフォーマンス 6.スポーツにおけるリーダーシップ 7.教育、トレーニングと能力開発 8.スポーツ情報と研究 9.資源 10.国内および国際協力

IOC(国際オリンピック委員会)は1995年に「宣言」に署名し、オリンピック憲章に男女平等の項目を加えて、女性スポーツワーキンググループを発足させるなど、積極的に取り組んできた。スポーツ関連組織に対して、「女性役員の登用を2000年末までに少なくとも10%以上、2005年末までに20%以上」と呼びかけたのも、その一環である。また、女性役員育成セミナーを世界各地で開催し、実績を上げている。

現在はJOC(日本オリンピック委員会)を含め、各国オリンピック委員会、スポーツ団体ほか政府のスポーツ関連機関等、350以上の組織が署名している。

詳細はJWS(ジュース)のウェブサイト(www.jws.or.jp)をご参照ください。

■　会員の広場　■

蓮見直子さん

国家公務員

昨年、大学を無事卒業し、東京で就職して９カ月。しばらく大好きなバドミントンもできずにいたが、知人が活動していることを知り、久しぶりに道具一式を持って、都内の障害者スポーツセンターへと向かった。

そこで偶然にも、現役時代に練習や試合で一緒だったＭさんと再会した。以前と違うのは、彼女が車椅子に乗っていたことだった。最近ようやく打てるようになったという彼女に「シャトル打たない？」と誘うと、「え～、いいの？」と言いながら相手をしてくれた。

ラケットを持たない手で実に上手く車椅子をコントロールしながら、シャトルを捕らえようとしていた。限られた身体機能を持つ人たちは、それを実に見事に使いこなしている。思いっきり自己表現していた。とっても自由に・・・。はてさて、自分はいかがなものか？自分の限界を決めつけて線引きしてないだろうか？今持っている機能を活用する能力は彼女の方が数段も上だと思った。

金子和子さん

日本３Ｂ体操協会
公認指導士

３Ｂ体操のスローガンの１つ「健康で美しく老いる」が特に好きで、「美しく老いるには？」「楽しく笑顔で運動効果をあげるには？」が、私のテーマです。体操を指導して、素敵に生きている方たちの一助を担えれば幸いです。

サークルの代表者で会員歴15年のＮさんは、リウマチで常に体を動かしていたいと60歳で入会。この15年間にリウマチで変形した肘・手首の手術を2回、緑内障の手術、胃がんの手術、脚立から落ちて大腿骨折で手術と、5回も入院しながら、驚くほど早く復帰してこられます。「ベッドの上でも体操していたの」というＮさんの「不屈の精神」にいつも拍手を送っています。

会員歴9年のＯさんは、64歳で入会。「３Ｂ体操が楽しくて」と、休まず通ってきています。ご主人が心臓の手術をしたり、がんの手術をしても「楽しみにしている体操だから、休まず行きなさいと言ってくれるの」と、いらしています。私自身、80歳になっても指導者でありたいと、日々楽しく励んでいます。

後藤忠弘さん

国立市社会教育委員

八木前会長の急死に伴い、その残任期間、日本オリンピック委員会（JOC）会長職にあった竹田恒和さんが、3月の役員改選で改めて会長に推され、自身の就任承諾と同時に女性理事1人を増やすとともに、新しく「女性委員会」を設けた。

今回、理事となった女性は、小野清子さん（日本スポーツ芸術協会会長）と平松純子さん（国際スケート連盟フィギュア技術委員）。複数の女性理事誕生は初めてである。国際オリンピック委員会（IOC）は、各国の委員会に「少なくとも2割は女性を登用するよう」ガイドラインを示している。

竹田会長はそれに応える形で今回、1人を増やした。人類の半分は女性であり、たとえIOCの“2割”が実現しても、舞い上がってはいられない。しかし、現実は厳しい。竹田会長は、そこで「女性委員会（小野清子委員長）を通じて、各競技団体内での女性役員の登用を推進、JOCの役員増加を図る考えでは？」と、私は推察した。そう考えると、たとえ1人増加でも意味は大きい。

◆◇◆　事務局便り　◆◇◆

◆「要望書」提出から１３年

私たちWSFジャパンが「女性役員の登用」と並んで、「女性スポーツ委員会の設置」についての「要望書」を日本体育協会（体協）と日本オリンピック委員会（JOC）に提出したのは、1990年12月25日のことでした。

あれから13年目の今年4月、ようやくJOCに「女性スポーツ委員会」が設置されました。次は体協の番です。ちなみに、韓国では1987年2月の時点で、すでに大韓体育会の組織に「女性体育委員会」が作られていました。

◆「スポーツと文化」をお分けします

2ページのMessageにも書かれていますが、「スポーツと文化」という冊子（全64ページ）は、秩父宮記念スポーツ博物館が中心になって、昨年10月から取り組んでいる「スポーツ文化調査研究事業」の一環です。

創刊号の特集は「オリンピックに未来はあるか」と題して、猪谷千春、青島健太、井谷直樹、小野清子、塚田佐、三ッ谷洋子の各氏による座談会が組まれました。

この他、国際政治や民族、芸術などからのアプローチなど、幅広い分野からスポーツが「料理」された、盛りだくさんな内容です。

「女性とスポーツ」の項は、三ッ谷代表の執筆です。ご興味のある方には、本冊子をお分けしますので、事務局までご連絡ください。（但し部数に限りがありますので、お早めに。）

◆マスコミの影響力

1月24日付けの朝日新聞の朝刊に、三ッ谷代表が「人」欄で登場しました。早速、あちこちから電話やらメールが殺到。

会員や三ッ谷代表の知人・友人からは「朝日の記事、見ましたよ」というもの。その他、朝日の読者からは「20周年記念誌を購入したい」という嬉しい注文のほか、「スポーツライターになりたいという孫娘に、どんな勉強をさせたらいいのか」という、“優しいおじいちゃん”からの問い合わせもありました。

また、NHKラジオで毎朝放送している「いきいき倶楽部」という番組にも、出演依頼がきました。

昨年の20年史の発行がきっかけで、久しぶりにWSFジャパンをPRする機会が増えています。とはいえ、とかく世間は忘れっぽいもの。活動を継続していくことこそ、大切です。

◆前号の訂正について

前号（41号）のインタビュー記事（4ページ）において、1994年の世界女性スポーツ会議を「第2回」としましたが、正しくは「第1回」の誤りです。訂正いたします。

◆寄付のお礼（４月末日現在：敬称略）

以下の方々から会費納入とともに、ご寄付をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

・青山和代・小原敏彦・島健・後藤忠弘・鈴木律子・佐々木秀幸・千葉吟子・野々宮徹・島谷順子・竹内里摩子　（計10人、10件49，110円）

◆新入会員（４月末日現在：敬称略）

【個人会員】　永田千恵（東京都・文京区）

事務局移転のお知らせ

6月30日より、下記の住所となります。小田急線の千歳船橋駅から徒歩約10分です。都心から少し離れますが、その分、広くなります。

お気軽にお立ち寄りください。

〒157-0071 東京都世田谷区千歳台1-41-19-310
TEL：03-5490-1877　FAX：03-5490-5922

WSF Japan News 第42号（2003年4月）

発行：WSFジャパン　発行人：三ッ谷洋子　編集・製作：SPORTS 21
〒151-0066 東京都渋谷区西原3-36-23-202 SPORTS 21内
TEL：03-3467-4360　FAX：03-3467-5455

ＷＳＦジャパンとは

1981年12月、米国ＷＳＦ（Women's Sports Foundation=女性スポーツ財団）をお手本として設立されたボランティア団体です。プロ・アマや年齢を問わずスポーツに様々な形で携わる女性が抱える問題を解決し、女性の視点からのスポーツの研究を通じ、女性スポーツの振興を図ることを目的としています。

主な活動は「WSF　Japan　News」の発行、「女性スポーツフォーラム」の開催、「女性スポーツの現状についての調査・研究」、「女性スポーツに関する情報提供」などです。会員は、元選手・指導者・研究者などのほか、マスコミ・一般企業の関係者など男女を問わず、様々な分野に渡っています。

＜入会金と会費＞

	入会金	年会費
・学生会員	3,000円	5,000円
・個人会員	3,000円	8,000円
・団体会員	5,000円	15,000円
・賛助会員	50,000円	100,000円

～～～米国ＷＳＦについて～～～

1974年、米国のトップテニス選手だったビリー・ジーン・キングが提唱して設立されたのが、非営利の女性スポーツ振興団体ＷＳＦです。発起人は、東京オリンピック陸上競技100m優勝のワイオミア・タイアスを初めとする米国のプロ・アマ一流選手や指導者、研究者など。

毎年、秋の「表彰ディナー」は、一般の人も有名選手と同席できる形式としてチケットを高額で販売するなど、様々な活動で資金を捻出し、女性スポーツの振興に取り組んでいます。

主な活動は次のようなものです。①情報サービス　②優秀選手・指導者等の表彰　③ニュースレターの発行　④会議、セミナーの開催、講師の紹介や派遣　などです。

（事務局：Women's Sports Foundation / Eisenhower Park, East Meadow, New York 11554
http://www.womenssportsfoundation.org）

女性スポーツを応援しています。

スポーツビジネス総合シンクタンク

SPORTS 21®